

CPD広報委員会 議事メモ —CPD協議会—
<メール委員会>

開催日時：2022年1月16日、17日、20日、24日

2022年3月10日、16日、23日、30日、4月5日

メンバー：奥津、加藤、尾崎、原、

添付資料：CPD推進ホーム内容 No. 13

議題：CPD推進 一口メモ No. 13 について意見交換

・1/16（原）：一口メモ案送付

・1/17（尾崎）コメント：本研究開発の成果が企業の事業にどのように貢献したのか。
製品性能の向上、製造効率の改善などの成果が記載できれば、
更にインパクトのある事例になると思います。

・1/20（尾崎）コメント：「寿命向上に貢献」と「実験を見学してもらう」の
順番入替えの方がインパクトが強くなるかと。

・1/20（原）：以上の修正を行い、rev1 CPD推進一口メモ No. 13 を送付

・1/20（尾崎）：内容了解

・1/24（原）：運営委員へCPD推進一口メモ No. 13 を送付

・3/10（原）：運営委員の指導により次の添削を実施し、委員へRev4を送付。

ページ13-1

前：文章 2) S社員の複数の学協会入会

後：文章 2) S社員のCPD活動

ページ13-1

前：文章 3) P大学K教授との出会い

後：文章 3) 大学教授指導によるCPD活動

ページ13-3

前：タイトル 2) S社員の学協会入会

後：タイトル 2) S社員のCPD活動

ページ13-3

前：文章・S社員は、・・・へ入会（個人負担）

後：文章・S社員は、・・・へ所属しCPD活動

ページ13-4

前：タイトル 3) P大学K教授とS社員の出会い

後：タイトル 3) 大学教授指導によるCPD活動

ページ13-5

前：文章 ・産学連携契約なしで社員Sは企業で特許出願可

後：文章 本1行 削除

ページ13-6

前：文章 ・F 社の開発企画に沿った研究（3 年間）

後：文章 本 1 行 削除

ページ 13－6

前：文章 ・K 教授主査で複数の学会へ「F 社+P 大学」連名で学会発表

後：文章 ・複数の学会へ「F 社+P 大学」連名で学会発表

ページ 13－6

前：文章 ・博士後期課程の修了

後：文章 ・K 教授主査で 3 年間の博士後期課程の修了

ページ 13－7

前：文章 ・顧客現地での F 社新技術の実用化実験

後：文章 ・新技術の実用化後 F 社にて S 社員 CPD 活動継続

・3/16（加藤）：最終ページの変更した「新技術の実用化後 F 社にて S 社員 CPD 活動継続」は同ページの他の項と一寸違って、浮いているように感じます。削除しても良い気がします。書くのであれば最後の行に持ってきた方が良いと思います。また「次を狙って」など CPD 活動継続の狙いがあるともっと良いかと個人的には思いました。

・3/23（原）：加藤氏の指摘通り次の改良案を検討。改良案（2） rev4 を作成委員へ送付。

改良案（1）：この 1 行を削除する。

改良案（2）：この行を、最後に移行して、以下の文章とする

・次の開発を狙って S 社員は CPD 活動を継続

・3/23（加藤）：異論なし。

・3/23（尾崎）：一口メモ案、追加のコメント等はなし。

・3/23（奥津）：添付資料と CPD との関連性がわからない。最初のページは目次で、つづくページはそれに沿ったポイント（要約）だと思う。それが最終ページ 第 7 ページの結論になるのかどうか？これは Happy な結論なのか？が私にはピンときませんでした。論文が書けると良いのかどうか？製品に反映して社会がよくなるならわかります。論文など経験を積みれば誰にでも書けるのではないのでしょうか？私はむしろ K 教授に不快感が湧きました。この K 教授は世界にインパクトを与えたりっぱな人物なののでしょうか？ちょっと不安です。私の経験では大学の教員らしい人材はここ数年 非常に減っています。学位の無差別な粗製乱造のためです。「スキル」と「人格」とともに成熟している人材が非常に少ない。日本工学会としての広報とはどういうものがふさわしいか私も分かりません。

・3/29（原）：奥津氏のコメントに対する、次のコメントを送付。

1）本資料と CPD との関連性？：これについては運営委員会にて須藤委員長から同じ指摘を受けた点です。その結果、原稿の 6 箇所へ「CPD」の言葉を追加した。つまり学会入会や博士課程は当たり前で、より高度な活動が CPD ではないか？ということとし

た。この事例の主が、本当に高度な CPD 活動したかどうか？は言葉では伝えられませんが。

- 2) 博士後期課程の成功または有効性？：これについては、本資料では、博士課程の修了が企業開発に有効であったとは書いていません。研究でそのような実用性開発は無理だと思います。この事例では、S 社員一人では能力が無く、学会活動や博士課程で新しいシーズ情報を強制的に得て勉強できただけのことです。k 教授に開発成功の能力もないと思います。
 - 3) 開発の成功、製品へ反映、社会へ貢献？：本資料では「寿命向上に貢献」程度の言葉しか出していません。完璧なサクセスストーリーの事例では無いと思います。
 - 4) 本資料は、多額の産学連携費用も出せず、有能な社員もいない会社で、S 社員へ複数学会へ入らせて、博士課程で k 教授に手伝わせて、帰社して開発までたどり着いた、という事例です。
 - 5) 一口メモが、広報かどうか？：高度な CPD 活動とは、どういうものか？判りませんし、広報活動がどういうものか？わかりませんので、ご指導頂けると幸いです。
- ・なお、奥津さんのメールはコメントとして受け止め、ホームページの更新へ進みたいと思います。

- ・ 3/30 (石原) : No. 13-6 の最下段、「K 教授主査で 3 年間の博士後期課程の修了」の「主査」の使い方に違和感があります。主査を使うなら、「K 教授を主査とする学位審査に合格」となりますが、(学位取得でなく) 課程修了を言いたいなら、「K 教授の研究室で (or の指導の下) 3 年間の博士後期課程の修了」でしょうか。(「主査」は論文審査で主担当を務める先生を指す言葉です。)

- ・ 4/5 (原) : 了解しました。一口メモ No. 13-6 を以下修正します。

正：k 教授研究室で 3 年間の博士後期課程の修了

誤：k 教授主査で 3 年間の博士後期課程の修了

- ・ 4/5 (原) : 菊地氏へホームページ原稿メール送付

- ・ 4/11 : ホームページ更新

以上

作成：広報委員長：原